



暗闇騎馬合戦

ことのはじまり

この町には『暗闇騎馬合戦』なるものが存在する。

それは昔、敵に夜襲をかけるべく闇夜に原野を駆けずりまわった殿様を祭った行事らしいのだが、古い歴史に埋もれてしまって詳しいことは誰にもわからない。いまとなっては起源に深い意味もなく、たまに町長が思い出した年に、気が向いたら催される、そんな程度の祭りである。

何せ疲れる。

夜通し騎馬を組んで町内を走り回るのである。暗闇なので怪我も多かった。夜が明けると阿鼻叫喚の地獄絵図が広がっていた……、なんてことも珍しくはない。よほどの酔狂がなければやってられない祭りであった。

そんな祭りが今年が開催されるのだという。

二十年ぶりであった。

もはや正気の沙汰とは思えない。

だが、私は内心でほくそ笑む。この年に開催されるというのも、私にとっては行幸というべきものだろう。

日村末弟。

この男だけは倒さねばならぬ。私の娘を嫁に貰うというのである。悪であった。目に入れても痛くない娘の選んだ花婿を始末せしめるのは心苦しい気持ちもあるが、父たる威厳を見せつけておかねばならなかった。

祭りの開催を耳にしたその日から、私は騎馬となるべき会社の後輩を無理矢理率いて、たゆまぬ研鑽を積んだのだった……。

合戦前夜

梅雨空にどんよりとした灰色の雲が広がっている。ここ数日は曇りの日が続いて、当日も同じような天気になるらしかった。よほどの大雨でも降らないかぎり、祭りは決行されるだろう。

いま私の手元には日村の鉢巻きがある。鉢巻きは愛する人が用意するという古き習慣に則って、娘が縫った手製である。昨夜遅くまで針に向かっていた娘が、縫い上げて睡りについた隙をついて拝借してきた。

私はその鉢巻きを持って、県外の岬まで車を走らせた。

ヘッドライトが闇と溶け合う。私は娘との会話を思いだして感慨に耽る。

私の鉢巻きは妻が編んでくれなかったので自分で縫製していた。しかしながら娘と隣り合って裁縫に勤しむのもなかなか楽しい機会だろう。

そんな私の様子に娘の慶子は

「張り切りすぎて怪我しないでね」

と奴の巻く布きれに針を通して言った。

私は年寄り扱いされることに憤慨して

「俺は絶対最後まで残るからな」

と言い放った。

「約束ね」

娘が笑う。私はその笑顔にちくりと胸が痛むのを感じた。

港に着くと案の定、海面が光っていた。私はそれを見て自分にツキがきていることを確信した。夜明けが近づき、渾然たる青白い輝きを見せる海の前で、ロープで縛った鉢巻きを防波堤からそっと海に浸す。鉢巻きは海水をじっくりと染み込み、海藻のように揺れた。

機は熟した。あとは天命を待つのみであった。

暗闇騎馬合戦

空は厚い雲に覆われ、月さえも見えない。真っ暗闇のなか、騎馬たちはなんども田圃に足を取られ、私は泥の地面に放り落とされそうになった。まさに手探りである。途中で二組ほどの騎馬に遭遇したが、訓練を積んだ巧みな逃げ足で煙に巻く。

狙うは日村の首ひとつである。

ふがいなく他の騎馬に屈していないことを、敵ながら祈るばかりだ。

ほどなくして日村を見つけた。

海に浸した鉢巻きが効果靦面であった。海水と共に夜光虫を吸い込んだ布きれが、黒い闇でぼんやりと光を放っている。日村自身も気がついていよう、しきりに手で覆い隠してはいるが、指の隙間から光る神秘の青光は私を勝利の頂へと導いていた。私は声を潜めて、ゆっくりと近づく。およそ5mというところで、私にはもはや日村の姿しか見えていなかった。足下で必死に私を支え、虫の息となっている騎馬の部下たちの荒い呼吸もいまは感じなかった。じっとりとした空気だけが私を押し包む。距離が縮まる。まさに好機。あと少し。私は昂ぶり、心臓が早鐘のように脈打った。

そのときぼつりと何か頬にぶつかった。前髪から滴る汗か田圃の泥水かと思ったが、それはやがて二滴、三滴と、立て続けに顔を跳ねた。雨である。いままで溜めこんでいた雨雲が、決壊したように落ちてきた。

およそ梅雨とも思われぬ、夏の通り雨のような激しい雫が降り注いだ。日村の鉢巻きから夜光虫が、どんどん洗い流されていく。私は焦った。ここで逃がすわけにはいかない。天下の分かれ道、覇道の道筋がそこにはあるのだ。私は雨のもやで視界が利かない中、雄叫びをあげて日村へと襲いかかった。相手はまだ私の方角も距離も掴んでいないに違いない。

伸ばした腕が日村の首まであと少しと迫ったところで、騎馬が何でもない草むらに引っかかった。

私はつんのめり、何かにすがるべく両手を不格好に動かした。日村の肩がそこにはあった。

私は自分を支えるべく、踏ん張って両手で日村の――咄嗟のこととはいえ、一生頼るまいと決めていたはずの――肩を掴んでいた。

「いたたたた」

騎馬の前衛が悲鳴をあげて倒れた。私は残りの後衛と日村に寄りかかってどうにか落ちないようにしている有様だった。

「こらっ。どうした！ 早く戻れ」私は叱咤する。

「ダメだっ。捻挫したっ。無理！」前衛の田中は無茶だと首を振った。

「くうう……ここまでか……。無念、無念だ」

私はうなだれた。

いまここに日村の鉢巻きがあるというのに、私が手を離せば騎馬はとたんに崩れ落ちるだろう。

日村が私を見て腕を動かした。もはや天命は尽きた。私は覚悟を決めて、無駄な抵抗もしなかった。好きに鉢巻きを取るがいい。

するとどうしたことか、日村は自分の騎馬を降りると、私の騎馬の前衛に加わった。

私は目を疑う。

「僕が支えますよ、お父さん」

日村は笑顔で、憎たらしくそう言った。

前衛が転んだ場所には、よく見ると草を結んで輪っかが編んであった。なんて卑怯な罠であろうか。それを指摘すると、日村は私の娘が作ったものと明かした。

娘曰く「あなたの鉢巻きが光っているから、電燈に群がる羽虫のように騎馬が寄って罠にかかるだろう」と。私は驚愕した。よもやバレているとは思わなかった。まさに親子である。

「ええい、降ろせっ」

私は怒鳴った。

日村は落ち着いて

「駄目です。慶子さんに最後まで残ると約束されたんですよね？ 娘さんとの約束を違わせる気ですか？」と私が前日に娘と交わした約束を持ち出した。

言葉が出てこなかった。

私は腹をくくって、娘婿の騎馬に跨がり鬼神の如く戦った。

流した涙は雨に紛れてわからなかったに違いない。

実に悔しく、快い心の汗であった。

兵どもが夢の跡

夜が明けて、不毛な消耗戦から集合場所に帰陣してきた騎馬はわずか数騎だった。そこでは参加していなかった町民たちが、テントを張っておにぎりや温かい汁などを作って待っている。私はあたりを見まわした。

群衆の中に妻と娘の姿を見つけたとき、私は前衛に居座る日村も忘れてただ誇らしい気持ちでいっぱいになった。

「パパ、おめでとう」

娘が言った。策士め。私の負けだ。

それから五年が過ぎた。

娘は幸せな家庭を築き、孫も二人できた。

妻と孫の顔を見るのが何よりも楽しみだ。

あのときの写真は居間に飾られ、いまでも語り草となっている。

フレームの中には

楽しげに微笑む娘がいる。

その後ろで、日村と肩を抱き合わせて涙を堪える、私のひきつった笑顔が映っていた。

あの年以降、暗闇騎馬合戦は一度も開催されていない。

日村との決着は、次回までのお預けである。

あとがき

『お題：夜光虫-鉢巻き-梅雨』という某三題噺サイトのお題から連想されたお話です。

.....少しでも楽しんで頂けましたでしょうか？

今回は特にテーマもなく お題のままに書き連ねてみました。

こんなおバカな祭りがあったら嫌です。

最後まで目を通して頂いた、すべての方に感謝をいたします。 惠賂。

2012/03/20 第一版

2013/12/06 第二版 微細な文言修正

コメントに感想など頂けると嬉しいです。